

認識人間学 I

試験のヒント

1. デカルトにおける懐疑のプロセスを説明できるか
2. 神の存在証明はどのようなものであったか（デカルト以外も）
3. ロックの『人間知性論』の言葉を覚える
4. ロックによれば色、熱さ、などは観念だという
→なぜ観念なのか
5. カントの認識論の全体像を説明できるか

1. デカルトにおける懐疑のプロセスを説明できるか

・出発点

私たちは以下のようなことを起こしてしまう

- ・見間違いなどこれまで間違いを犯したことがある
- ・夢と現実の区別がつかない
- ・欺く神が存在し、我々人間をだましている
(真ではないことを真と思わせているかもしれない)

→何も信じられなくなる

自分は何をやっているのか
すべてを疑っている

→疑っているのであれば、疑っている自分の存在は疑いようがない、
という結論に

「我思う、故に我あり」(Cogito ergo sum)

ここでいう私(我)というのは自身の精神のことであるといえる

それでも、私は相変わらず何かを見たり音を聞いたりしている。色が見えたり音が聞こえたりしていることは、否定しようがない。これら、現に感覚されている色や音などのことを、デカルトは「観念」と呼ぶ。

→この観念から神の存在証明に移行する

(参考)

・アルキメデスの点

これ以上遡行できない、一つの基礎的なもの
アルキメデスの寓話になぞらえて言われたもの
デカルトが求めた根本原理でもある？

2. 神の存在証明はどのようなものであったか

(存在論的証明)

この証明を行った人物としてアンセルムスが知られている。以下にその証明方法を示す。

神とはそれよりも大きいものが考えられないもの、それは心の中にだけ存在することはできない (心の中にだけでなく実在しなければならない)。というのももし心の中にだけ存在するとしたら、実在すると考えることもできるからだ。それはより大きい (偉大だ) ということだ。

(宇宙論的存在証明)

古代の哲学者アリストテレスが行った存在証明。

この世界においては動くもの (結果) が存在する。つまりそこには動かすもの (原因) が存在する。つまりそこには動かすものを動かすもの (原因の原因) が存在する。つまりそこには (r y

しかしながら以上のプロセスは無限にあるわけではなく、根本的な原因、すなわち「不動の動者」(それ自身は他のものに動かされず他のものを動かす) が存在するはずである。これこそがアリストテレス的の神であり、神が存在することの証明となる。

(デカルトによる証明)

我々は神の観念を持っている。ここで

神→無限なるもの

私→有限なるもの

すなわち何か神の観念 (無限) を私 (有限) にもたらすものがある (自分が作ったものであるはずがない)

→それが神なのである

又、その神は善なる神か、悪なる神か

→神は完全なもの

→善でしかありえない

(悪は何か欠けてしまっている)

3. 『人間知性論』のことば

「人間の知識の起源と確実性と範囲を探究し、あわせて信念や意見や同意の根拠と程度を探究する」

4. なぜ観念なのか

・観念とは

- ① 感覚によって知覚される様々なもの（色、形、音、熱さ）
- ② 心像（想像、記憶など）
- ③ 概念
- ④ 感情
- ⑤ 心の作用

ここで物体は以下の性質を持つ

・一次性質

物体がそれ自身で持っている性質

大きさ、形、固性、数、運動、性質

・二次性質

我々に物そのものがもっていない色、味、熱さなど感じさせる能力

ここで問題となるのはロックにとって私たちが頭の中で思い起こす物の色や音、これはもちろん観念に当たるのだがそれだけでなく実際に我々が知覚している色や音さえも観念だという。

→それはなぜか?（これが本題）

ロックは哲学者であるいぜんに科学者でもある。そして彼は粒子仮説の立場をとっていた。彼の考えからすると物体の色というのはその表面に存在しているものではなく、粒子（これ自体は色を持たない）が私たちの眼球へ到達し刺激することでそれを色と感じさせているということになる。つまり色というのは実際に存在するものではなく心が直接知覚しているものであるということとなる。そのため実際に我々が感じている色というのは観念の一つとして定義されるのである。（そのほかにも同じ理論）

5. カントの認識論全体図

1. カントの認識論

物自体（我々は認識不可）に心が触発され、表象（≒観念）が生み出される。そして感性、悟性の作用により我々は周りの世界を見ている。

- ・感性…表象を受容する能力
- ・悟性…概念把握能力

我々は感性によって与えられた表象の世界を見ており、その世界がどうなっているのかを悟性の働きによって把握する。これがカントによる認識のプロセスである。

2. 理性とは

狭義の理性（＝推論能力）

知識を拡大する能力

→あらゆる経験の範囲を超えて認識を求めようとする

しかしながらこれらが行き過ぎて、概念だけをいじくりまわしいろんなことを考え始めてしまうこともある

ex. 「世界に始まりはあるのか」

このような問題は感性によって与えられたものをもとにして考えられるものではない。

→知的営みの是非について審判を下す理性の法廷としての認識論